

夕方六時を少し回った頃、

倫斗（㊦）のワンルームマンションのインターホンが鳴った。

「倫斗くん！ おつかれさま！」 明るい、馴染みのある声。
倫斗は一瞬で誰だかわかった。

バイト先のカフェで一緒に働く先輩——美月さんだ。

31歳の人妻で、夫は長期出張中らしい。

（……マジかよ。急に来るなよ……全然片付けてねえし）

心臓が少し速くなるのを感じながらも、倫斗はドアを開けた。

「わっ、遅くにごめんね！ ビールとおつまみ持ってきたよー。
ね！ ゲームしよ？ どうせ倫斗くん、暇でしょ？」

美月は笑顔いっぱいに入ってきた。

白のオフショルダートップに短めのデニムスカート。

31歳とは思えない若々しいスタイルなのに、
胸元と腰回りの柔らかな肉付きが、女の色気を隠しきれていない。

「みっちゃん……」

って！ バイト終わりに急に来るなんて珍しくないですか？」

二人きりの時だけ使うみっちゃん呼びを出すと、

美月は「えへへ」と照れたように笑った。

「だって最近、旦那もいないし、暇でさ。

倫斗くんの部屋でゲームしたら楽しいかなーと思って」

他にも友達がいるのになんで俺？ 倫斗は内心で疑問に思いつつ、少し期待しながら、リビングのソファに彼女を招いた。

彼女は慣れた手つきでコントローラーを取り出し、ゲームを起動させた。

美月はビールを飲みながら、

コントローラーを握り、画面に向かってはしゃいでいる。

でも、だんだん彼女の行動が変わり始めた。

「あ、これ取ってくれない？」 美月はソファから立ち上がり、テレビ台の低い位置にあるゲームソフトの棚に屈んだ。

わざとらしく腰を突き出し、スカートが捲れ上がる。

倫斗の視線は、自然とその丸いヒップと、太ももの付け根に吸い寄せられた。

(……下着、見えてるじゃん……)

薄いグレー色のショーツ。

しかもすでに、股布の部分がうつすらと湿っているように見えた。

「みつちゃん……ちよつと、姿勢ヤバいつて」

倫斗が声をかけると、美月は肩越しに振り返り、頬を赤らめながら言った。

「え……？ やめてよ倫斗くん。そんな見ないで……」

口ではそう言いながら、彼女は腰をさらにくねらせ、わざと胸元を強調するように上半身を低くした。

オフショルダーのトップがずれ、

ブラジャーに包まれた豊満な谷間が大きく露わになる。

倫斗の股間が、一気に熱を持ち始めた。経験がないわけじゃない。

そこそこモテる顔と、筋トレで鍛えた体は伊達じゃない。

でも、美月は特別だった。

誰にでも公平で気さくで明るい憧れの先輩で、それでいて夫がいる人妻で……

でも今、目の前でこんなに積極的に誘惑してくる。

「……本当にやめてほしいなら、普通に座ればいいのに」

倫斗はソファに深く腰掛けたまま、余裕があるふりをして意地悪くニヤリと笑った。
どこか彼女の反応を見たくて仕方ない自分がいる。

ゲームのタイトル画面が放置されたまま、部屋に微妙な沈黙が落ちた。

「そうだ！ さつき言ってた新作のソフト、倫斗くん持つてるよね？ 探してみよっか」

「え、ああ……テレビ台の下の棚に入ってるはずだけど」

倫斗が答えるより早く、美月は「わかった！」と軽い声でテレビ台に向かった。

そして、まったく迷うことなく——膝をつき、大きく腰を突き出す四つん這いの姿勢になった。
短いデニムスカートがするりと捲れ上がり、白く柔らかい太ももが露わになる。

（さつきよりさらに際どい姿勢…）

その奥、薄いグレー色のショーツが、はつきりと倫斗の視界に飛び込んできた。

「……っ」

倫斗の息が止まった。

ショーツの股布の中心に、丸く、さつきよりはつきりと浮かぶ透明な濡れシミ。すでにかなり量が多いのか、布地が肌に張り付き、淫らな形をくつきりと浮き彫りにしている。

（嘘だろ……さつきからあんなに濡れてたのか？）

倫斗は喉を鳴らした。

経験はあるとはいえ、人妻のこんな生々しい部分を、こんな至近距離で見せつけられるのは初めてだった。

理性が「これはヤバイ」と警鐘を鳴らしているのに、下半身は正直に熱く硬くなっていく。

美月は棚の中をゴソゴソと探りながら、完全に無自覚を装った明るい声を出した。

「んー、どこだろう？ あ、倫斗くん、これかな？」

ショーツの食い込んだ柔肉の形まで丸見えになる。

濡れた部分が、動きに合わせて微かに糸を引いているように見えた。

「美月さん……いや、みつちゃん」

倫斗の声は低く掠れていた。

彼はソファから立ち上がり、ゆつくりと近づいた。

（いけるのか、いけないのか）

頭の中で激しく葛藤しながらも、

目は美月の淫らな姿から離れられない。

美月は肩越しに振り返り、頬を少し赤らめて言った。

「え……？ どうしたの？ そんなに見つめられたら……恥ずかしいんだけど……」

口では拒否の言葉を吐きながら、彼女の腰は微かに左右に揺れ、まるで誘うように倫斗の視線を煽っていた。

（行動は完全に積極的だ）

棚を探すふりをして、わざと長くこの姿勢を保っている。

倫斗は苦笑しつつ、意地悪く口角を上げた。

彼は美月のすぐ後ろに膝をつき、片手で彼女の腰に軽く触れた。熱い。柔らかい。すでに興奮で火照っているのが伝わってくる。

「ひやつ……♡触らないで、倫斗くん……くすぐりたいよ……」

美月はビクツと身体を震わせたが、逃げようとはしない。

むしろ、腰をわずかに後ろに押しつけるような仕草さえ見せた。

倫斗の指が、ショーツの濡れた部分にそつと触れた瞬間――

「っ……んあっ……♡」

美月の喉から、抑えきれなかった甘い声が漏れた。

布越しでもわかるほどの熱さと蜜の量に、倫斗はさらに興奮を煽られる。

「みっちゃん、……こんなに濡らして。ゲーム探してるだけ……ですか？」

「や……やめてつてば……変なこと、言わないで……」

口では必死に否定する美月だったが、太ももは内側に擦り合わせ、腰は小さく前後に動き始めている。

倫斗は彼女のそんなギャップに、胸の奥が熱くなった。

（人妻なのに……俺の部屋で、こんなに欲情してる顔して……）

彼は葛藤しながらも、指をゆつくりと動かし始めた。

布地の上から、丸く濡れた部分を優しく、でも執拗に撫で回す。美月の息がどんどん乱れ、棚に突っ込んでいた腕が震え始めた。

「っ………！ ♡倫斗くん……♡ほんとに……だめ、だつて……」

「でも、みつちゃんのここ、俺の指、離したがないよ？」

倫斗は動悸を隠し、ニヤニヤと笑いながら、意地悪く囁いた。

もう理性の半分は飛んでいた。

残りの半分は、まだ「ここで本気に出したら後戻りできない」という警鐘を鳴らし続けている。

美月は四つん這いのまま、顔を真っ赤にして肩を震わせていた。

その瞳は、期待と羞恥と、抑えきれない欲情でぐちゃぐちゃに蕩け始めていた。

四つん這いの姿勢のまま、美月の腰が小刻みに震えていた。

倫斗の指がショーツの濡れた部分を布越しに撫で回すたび、彼女の喉から抑えきれない甘い吐息が漏れる。

「んっ♡……はあ……♡♡倫斗くん、ほんとに……やめて……え♡♡」

（ここまで来て……本当にいいのか？ みつちゃんは人妻だぞ……俺、間違ってるよな……）

でも倫斗の指は止まらない。

むしろ、彼女の反応を一つ一つ確かめるように、円を描く動きを少しずつ強めていく。

「みつちゃん……顔、こっち向けて」

倫斗が低く囁くと、美月はゆっくりと上半身を捻った。

四つん這いのまま肩越しに振り返るその表情は、頬が真っ赤で、瞳が潤み、唇がわずかに開いている。

（エロい。あまりにもエロすぎる）

二人の顔が、ゆっくりと近づいていく。

息がかかる距離。唇と唇があと数センチのところまで。

「……キス、するの？」

美月が掠れた声でおずおずと尋ねた。

その言葉に、拒否の色は薄く、

むしろ「してほしいけど、してほしいくない」という複雑な感情が混じっていた。

倫斗は平常心を装って、ニヤリと意地悪く笑った。

彼は彼女の唇の形を、息の匂いを、すべて味わうように顔を近づけては、寸前で止める。何度も、何度も。

「するのかな……？ みつちゃんはやめてって言うなら、やめとく……けど」

「や……やめて、って……言ってる、でしょ……？」

美月の声はどんどん弱々しくなっていく。

唇が触れそうな距離で、彼女の吐息が倫斗の唇を熱く濡らす。

倫斗も同じだった。心臓がうるさいほど鳴り、

股間は痛いほど硬くなっているのに、まだ最後の一線を越えられない。

二人は何度も唇を寄せては離し、角度を変えてはまた顔を近づける。

まるでキスという行為自体を、じつくりと試すような、焦らすような時間。

「ん……♡はあ……倫斗くん、意地悪……っ」

「みつちゃんこそ……俺の唇、欲しがってる顔してるよ？」

「……んっ……♡」

ようやく、倫斗が意地悪な笑みを浮かべたまま、最初に軽く唇を重ねた。柔らかくて、熱い。

一瞬だけ触れて、すぐに離す。美月がビクツと身体を震わせた。

その反応が可愛くて、倫斗はもう一度。

今度は少し長く、角度を変えて。

でもまだ本格的なディープキスにはしない。

舌を入れず、唇だけを優しく貪るように何度も重ねる。

「は……んっ……♡♡や……そのキス、だめ……♡」
口では拒否しながら、美月は自ら唇を突き出してくる。

そのギャップに倫斗の興奮は最高潮に達しつつも、
まだ「本気でいいのか」という迷いが胸の奥に残っていた。

倫斗は美月を四つん這いのまま抱き寄せ、正面から向き合う形に体勢を変えた。
そしてようやく、深くキスをした。

舌を絡め、唾液を交換するような濃厚なキス。

美月は最初こそ抵抗するような素振りを見せたが、
すぐに自ら舌を積極的に絡めてきた。

「ん……んふっ♡♡……ちゆる……」

キスをしながら、倫斗の手は美月のオフショルダートップをずり下げ、
ブラジャーに包まれた豊満な乳房を掴んだ。

揉みしだき、形を変え、親指で乳首の先を刺激する。

「んっ…はあっ♡…はあっ……ちゆるっんちゅ♡」

美月はキスを続けながら、喘ぎ声を倫斗の口内に直接響かせた。

彼女の手も倫斗のズボンの上から、硬くなつたものをぎゅつと握ってくる。

部屋の空気はすでに淫らに熱く、重く変わり始めていた。

倫斗はキスを離し、美月の耳元で意地悪く囁いた。

「……まだ、やめたい？ みつちゃん」

美月は潤んだ瞳で彼を見つめ、唇を震わせながら――

「……わからない……」とだけ、か細い声で答えた。

キスを繰り返すうちに、二人はベッドの上に崩れ落ちるように移動していた。

倫斗は美月を仰向けに押し倒し、夢中で彼女の身体を貪り始めた。

「や……だめ、倫斗くん……ここから先は……本当に……」

美月が口で拒否する声も虚しく、倫斗はデニムスカートを完全に捲り上げ、グレイショーツの濡れた部分に顔を近づけた。

すでに大量の愛液でぐしょぐしょに染まった布地が、彼女の熱い秘部にびったりと張り付いている。

「みっちゃん……すごいな、これ」

倫斗は意地悪くニヤリと笑いながら、両手でショーツの端を掴んだ。
ゆっくりと引き下ろしていくと――

「ん……！ やめて、見ないで……♡」

美月が腰をくねらせて抵抗するが、遅かった。

ショーツが秘部から離れる瞬間、透明で濃厚な愛液がびゆるつと糸を引いた。

長く、長く、粘り気のある銀色の糸が、

美月の秘部と脱がせたショーツの股布の間に何本も伸びている。

倫斗の目が細められた。

「ははっ……みっちゃん、パンツ脱がせたらこんなに糸引いてるよ？
ゲーム探してるだけじゃ、絶対なかっただろ」

「ちが……う……言わないで……！」

美月は両手で顔を覆い、耳まで真っ赤に染めていた。

しかしその動作で、胸が強調され、硬く突った乳首がさらにピンピンに立っているのが丸見えだった。倫斗は脱がせたグレーショーツを指に引っかけ、彼女の目の前に掲げて見せた。

布地の中心はびしょ濡れで、糸がまだぶつぶつと繋がっている。

「ほら、見て。こんなに濡らして……エロすぎ」

彼はさらに指を美月の秘部に沈め、ゆつくりと出し入れし始めた。

クチュクチュという淫らな水音が部屋に響く。

指を抜いた瞬間、大量の愛液が指と秘部の間に長く太い糸を引いた。

「見て？ めちゃくちゃ濡れてますね、ねえ？ みつちゃん」

倫斗は意地悪く笑いながら、その指を美月の目の前で広げて見せた。

透明で粘ついた愛液が、指の間を何度も糸を引いて伸びる。

彼は何度も指を挿入しては抜き、

わざと愛液を塗り広げるようにクリトリスや太ももに塗り込んで、また指を掲げて見せつけた。